



＜今月の1枚＞放課 GO!GO!  
(フロアカーリングに挑戦)

## 字のない葉書

作家・脚本家の向田邦子<sup>むこうたくじこ</sup>が航空機事故でこの世を去って、まもなく45年が経ちます。倉本聰・山田太一と並び「シナリオライター御三家」と呼ばれ多くの名作を著していますが、今回はその中から、エッセイ『字のない葉書』を紹介します。

＜表現は原文ママ、途中省略あり＞

終戦の年の4月、小学校1年生の末の妹が学童疎開をすることになった。あまりに幼く不憫だ<sup>ふびん</sup>といってこれまで両親が手離さなかったのだが、3月10日の東京大空襲で、家こそ焼け残ったものの命からがらの目に逢い、このまま一家全滅するよりは、と心に決められたらしい。

妹の出発が決まると、父はおびた<sup>おび</sup>だしい葉書に几帳面な筆で自分宛の宛名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日1枚ずつポストに入れなさい」

と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれた嵩高<sup>かさたか</sup>な葉書の束をリュックサックに入れて、雑炊用のドンブリを抱えて、妹は遠足にでもゆくようにはしゃいで出掛けて行った。

1週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱい<sup>かみ</sup>はみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。地元婦人会が赤飯やポタ餅を振舞って歓迎して下さったとかで、カボチャの茎まで食べていた東京に較<sup>くら</sup>べれば大マルに違いなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは遂にバツに変わった。間もなくバツの葉書もこなくなった。母が迎えに行った時、百日咳<sup>ひやくにちぜき</sup>を患っていた妹は、虱<sup>しらみ</sup>だらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日の夜遅く、出窓で見張っていた弟が、「帰ってきたよ!」と叫んだ。

茶の間に坐っていた父は、裸足でおもてへ飛び出した。防火用水桶の前で、瘠<sup>や</sup>せた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

あれから31年。父は亡くなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のない葉書は、誰がどこに仕舞<sup>しま</sup>ったのかそれとも失くなったのか、私は一度も見ていない。

【引用：「向田邦子全集〈新版〉第6巻」(文芸春秋、平成21年初版)

人目もはばからず「大人の男が声を立てて泣く」のはこういう状況かもしれないと納得した私があります。そして、子どもが発する重要なサインに、どうすれば気付くことができるのかを、私はこの作品からヒントを得たような気もしています。

生涯学習推進アドバイザー 小田島 数幸 (前砂川高等学校長)